

平成28年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	山口大学教育学部附属 特別支援学校
-----	----------------------

I 概要

1 事業の概要

山口大学教育学部附属特別支援学校では、障害者(児)の余暇活動の機会の確保、参加者同士の交流による自立や社会参加の促進を目的に、昨年度「スポレク★くらぶ」という名称の障害者(児)を対象としたスポーツ・レクリエーション活動を開始した。一定の成果を上げた一方で、障害のある人を中心とした活動であること、取組が地域に広がっていないことが課題として挙げられた。

そこで、本事業では、この「スポレク★くらぶ」の取組をベースに、障害のある人となない人との交流及び共同学習に発展させること、大学から地域へ取組を広げていくことの2点を目指し、実施することとした。今年度は、山口市立平川小学校4年生及び山口市立平川中学校1年生と障害者スポーツをとおした交流活動を実施した。「スポレク★くらぶ」で行っている風船バレー、卓球バレー、ポッチャの3種目を、本校中学部生徒と平川小学校児童、本校高等部生徒と平川中学校生徒と一緒に体験しながら交流を深めた。また、3校合同で、リオパリンピック銀メダリストの講演会及び交流会を実施し、「夢をあきらめないこと、感謝すること」等の大切さを学ぶとともに、児童生徒間の交流を一層深めることができた。

本事業に参加した児童生徒に学校間の交流活動や交流会についてアンケートを実施し、その結果を含めて実践報告としてまとめ、県内の特別支援学校及び県内各市町教育委員会等に発信した。

2 事業の成果

(1) 障害者スポーツを通じた交流及び共同学習の取組

山口大学教育学部附属特別支援学校中学部生徒と山口市立平川小学校4年生児童とのスポーツ交流活動(4回)、同じく山口大学教育学部附属特別支援学校高等部生徒と山口市立平川中学校1年生生徒とのスポーツ交流活動(4回)を計8回実施した。種目は、山口大学教育学部附属特別支援学校の「スポレク★くらぶ」で行っている、風船バレー、卓球バレー、ポッチャの3種目にすることで、特別支援学校の生徒が自信をもって交流活動に参加できるようにした。

ア スポーツ交流活動

- ・はじめの会では、本校生徒が司会進行をした。また、両校の代表児童生徒が、お互いの学校のよさや特色を紹介し、その後3つの種目に分かれ、スポーツ交流を行った。
- ・風船バレーは、まず本校生徒がルール説明を行った。平川小・中学生は、これまで体験してきたバレーボールのルールとは異なることに戸惑いが見られ、初めはなかなか上手くできなかったが、少しずつ声を掛け合いながらパスをつなげられるようになった。
- ・卓球バレーは、小・中学生は初めて体験する種目だったが、特別支援学校の生徒と同じチームで競技をすることですぐに打ち解け、声を掛け合いながら楽しく活動することができた。
- ・ポッチャも小・中学生は初めて体験する種目だった。競技の仕方を特別支援学校の生徒が説明し、みんな真剣に聞いていた。赤チームと青チームに分かれ、ジャック

ボール(的玉)を目がけて集中して投げ、上手く投げたときは、双方から大きな歓声が上がって喜び合った。

- ・おわりの会では、両校の代表児童生徒が、感想を発表した。初めはお互いに緊張していたが、スポーツをしながら交流することで、おわりの会では自然と笑顔が増えた。児童生徒の発表からは、楽しく活動できたことがよく伝わり、交流が十分に深まったことがうかがえた。最後にみんなで挨拶をし、握手をして活動を終えた。

イ 実施後のアンケート結果

①スポーツ交流会において、楽しく交流活動ができたか

3校ともほとんどの児童生徒が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。特に小学校は、8割以上の児童が「とてもそう思う」と回答し、楽しく交流活動を行った様子がうかがえた。

②スポーツ交流会で行った風船バレーやポッチャ、卓球バレーなどの障害者スポーツに興味をもったか

小学校及び本校は、ほぼ全ての児童生徒が、「とても興味をもった」「まあまあ興味をもった」と回答した。中学校は8割程度の生徒が、「とても興味をもった」「まあまあ興味をもった」と回答した。

③他校の友達と仲良く活動できたか

小学校と本校の9割以上、中学校は6割の生徒が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

④他校のことをよく知ることができたか

小学校は9割以上が、「よく知ることができた」「まあまあ知ることができた」と回答した。中学校は7割以上、本校は8割以上が「よく知ることができた」「まあまあ知ることができた」と回答した。

⑤またスポーツ交流会に参加したいと思うか

小学校はほとんどの児童が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。中学校も7割以上、本校も8割以上が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

⑥同じ地域にある学校の友達と一緒に活動することはよいことだと思うか

3校ともほとんどの児童生徒が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

ウ 成果

○障害の有無にかかわらず、一緒にスポーツをすることを通して、楽しく交流することができた。また、風船バレーや卓球バレー、ポッチャ等の障害者スポーツの楽しさを味わい、ほとんどの児童生徒が障害者スポーツへの関心をもつことができた。

○スポーツをとおして交流するだけでなく、学校紹介や実施後に感想を述べ合う機会を設定することで、互いの学校のことをよく知ることができた。多くの児童生徒から、また交流会をしたい、もっと回数や時間を増やしたいという感想が聞かれ、ともに活動することの大切さを児童生徒が感じることもできた。

(2) 障害者アスリートとの交流

障害者アスリートとの交流を通して、障害者スポーツに対する関心を高めるとともに、障害についての理解を深め、特別支援学校の児童生徒と小・中学校の児童生徒との継続的な交流につなげていくことを目的に、3校の児童生徒が参加して障害者アスリートとの交流会を行った。講師として、リオパラリンピックポッチャ日本代表の木谷隆行選手を招くとともに、山口県障害者スポーツ協会の協力も得て実施した。

ア 講演会

前半の講演では、リオパラリンピックでの体験談やポッチャを始めたきっかけ等の

話を木谷選手と山口県障害者スポーツ協会の藤田会長との対談形式で進めた。途中、パラリンピックに向けて天皇陛下から励ましのお言葉をいただいた様子の動画やリオパラリンピックの写真等が紹介され、児童生徒は真剣に目や耳を傾けていた。最後に、木谷選手から児童生徒に向けて「あきらめないこと」「感謝する気持ちを持ち続けること」についてメッセージが贈られた。

イ ボッチャ交流試合

後半の児童生徒代表とのボッチャ交流試合では、山口県ボッチャ協会の選手にも参加していただき、木谷選手と児童生徒代表との交流試合を行った。木谷選手がジャックボール（的玉）の近くにボールを投げると、児童生徒から大きな歓声が上がった。各校の代表児童生徒もスポーツ交流会でいったボッチャの経験を生かし、アスリートと接戦を繰り広げ、楽しく交流試合を行うことができた。最後に、木谷選手がリオパラリンピックの銀メダルを披露しながら退場し、温かい雰囲気の中、障害者アスリートとの交流会を実施することができた。

ウ 実施後のアンケート結果

- ①リオパラリンピック銀メダリストの体験談を聞いて新しい発見があったか
3校とも8割以上が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。
- ②今の自分や将来の生活に役立てようと思うことはあったか
小学校は9割以上、中学校及び本校は7割以上が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。
- ③障害者スポーツのおもしろさに気付くことができたか
小学校と特別支援学校はほぼ全員が、中学校も8割以上が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。
- ④パラリンピックを見てみたいか
3校とも8割以上が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。特に小学校は約7割の児童が「とてもそう思う」と回答した。

エ 成果

- 障害者アスリートの体験談を聞いたり、デモンストレーションを見たりしたことで、新しい発見があり、あきらめないことや感謝することの大切さを学び、将来に向けての希望をもつことができた。
- パラリンピックや障害者スポーツに対する関心を高める機会になった。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

本事業で行った取組を継続し、地域に定着させていきながら、より発展させていくために、今後、以下の点に取り組んでいくことが課題である。

- 地域における共生社会の実現に向け、単年度の計画ではなく、計画的に、継続して取り組む必要がある。小・中学校に加え、地域にある高等学校とも交流学习を行い、より地域に根差した活動にしていく。
- 障害についての理解をより深めるために、特別支援教育に関する教員研修を行い、各校における事前学習を充実させる。
- 交流会において、児童生徒の交流を一層進めるための方法・内容を工夫する。
- 本校の「スポレク★くらぶ」の活動との関連をもたせることで、特別支援学校を活用した地域の障害者スポーツの拠点づくりを進めていく。